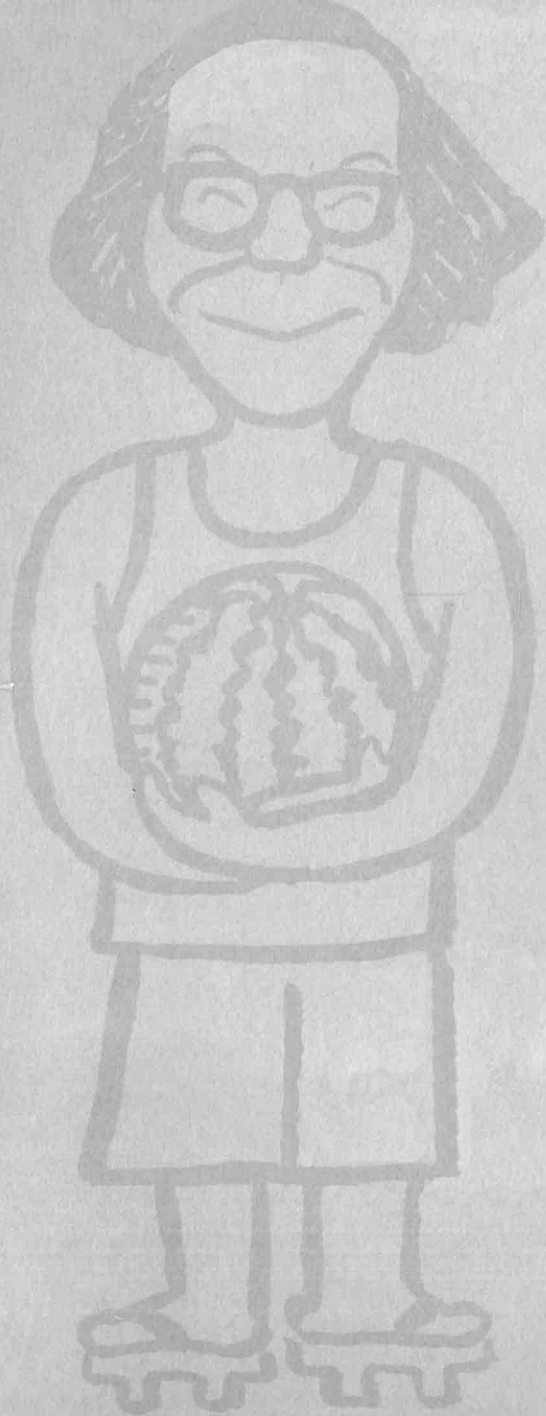


山崎方代歌集



illustration: shōji sadao

もんじゃ
えんや



山崎方代歌集

こんな
もんじや

こんなもんじゃ 山崎方代歌集やまざきほうだいかしゅう

2003年6月30日 第1刷

著者……………山崎方代やまざきほうだい

発行者……………平尾隆弘

発行所……………株式会社文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町3-23 〒102-8008

電話(03)3265-1211

印刷所……………凸版印刷

製本所……………大口製本

定価はカバーに表示してあります。万一、落丁乱丁の場合は送料当方負担でお取り替え致します。小社営業部宛お送りください。

© HOUDAI Ymazaki 2003 Printed in Japan
ISBN4-16-321970-6

こなもんじや

山崎方代歌集

カバー・表紙絵 東海林さだお
ブックデザイン・編集協力 菊地信義

こんなところに

釘が一本打たれいて

いじればほとりと落ちてしもうた

茶碗の底に梅干の種一つ並びおるああこれが愛と云うものだ

手の平に顔をつけて見ていると小さく小さくなつてゆく

右の眼をうつすらあけて見ておれば紙の袋が立ちあがりたり

寂しくてひとり笑えば卓袱台ちやぶだいの上の茶碗が笑い出したり

るり色の支那の土瓶には耳がない　口さえあればよいからである

口あけて列のうしろで仰げども天からは何も落ちてはこない

壁の穴にドアをとり付けしつかりと鍵を中からかけて住んでいる

もう何も申しあげません夜は早く灯を消して眠るにしかず

貧乏な詩人が一人住みついて酒をたしなみめしは食べない

手のひらに

豆腐をのせていそいそと
いつもの角を曲りて帰る

おもむろに茶碗のふたをそつと取りすすれどだれもいるはずがない

新聞紙に腰をおろして空っぽの頭の先を陽に干している

大きな波が寄せてくる　大きな笑いがこみあげてくる

こおろぎが一匹部屋に住みついて昼さえ短いうたをかなでる

ある朝の出来事でしたこおろぎがわが欠け茶碗とびこえゆけり

住みついて鳴いてくれたるこおろぎも唄を忘れてしまったようだ

こぬ人を待ちくらしているこの吾の背後と云えどのごき給うな

塩鮭の頭を下げてのしのしと吾があばら家に帰りてぞゆく

小屋のふた内からひらき陽を入れて心の底から暖まりおる

危うきかな一匹の白猫が闇に去ってゆく

皿の上にぬぐいし皿をかさねゆくこんちくしょうの夜の長さよ

股ぐらに手をおしあてて極楽の眠りの底にわれ落ちてゆく

うすぐらき棚に価をつけられてわが著書があるここにいたかよ

ある日ふと棚の上から音もなく帽子が落ちてころがれり

さいわいは空の土瓶に間いかけるゆとりのようなもののようなり

机の上に風呂敷包みが置いてある
風呂敷包みに過ぎなかつたよ

いつまでも転んでいるといつまでもそのまま転んで暮したくなる

洗面をおこたりおれば眼のへりのあたりに青いカビが生えて来た

口ひとつきかずにいるといちにちがながいながい煙管(きせる)のようだ